hector
Playing Interface

FOR SALE and USE IN JAPAN ONLY
本品の輸出、使用営業及び賃貸を禁じます。

製造・発売元
株式会社 ヘクト

〒102千代田区平河町1-5-13平河町UTビル
PHONE.03-5275-5481㈹
FAX.03-5275-3544

ファミリー コンピュータ・ファミコンは任天堂の商標です。

hector
Playing Interface

FAMICOM FAMILY

HCT-9A/011

囲碁指南'91

資料提供/日本棋院

取扱説明書

任天堂 ファミリー コンピュータ™

囲碁指南'91

囲碁の歴史上に残る名対局や、置碁の数々の棋譜を110局も収録しました。これらのすべての棋譜で「観戦」と「棋力判定」ができます。あなたの棋力アップの必ずやお役に立てるでしょう。

このたびは、㈱ヘクトのファミリーコンピュータ用カセット、『囲碁指南'91』をお買いあげいただきまして、まことにありがとうございます。ご使用の前にこの取扱説明書をよくお読みになって、正しい使用方法でお楽しみください。

■使用上の注意

●精密機器ですので、極端な温度条件下での使用や保管を避けてください。また強いショックを与えたり、絶対に分解しないでください。

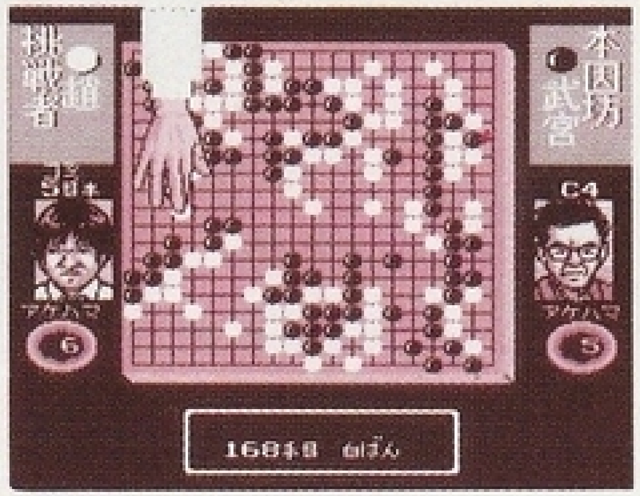
●端子部に手をふれたり、水にぬらすなどよごさないようにしてください。故障の原因になります。またシンナー・ベンジン・アルコールなどの揮発油でふかないでください。

●テレビ画面からできるだけ離れてゲームをしてください。

●長時間ゲームをするときには、健康のため約1時間ごとに10〜20分の小休止をしてください。

●ご使用後はACアダプターをコンセントからぬいてください。

囲碁指南'91



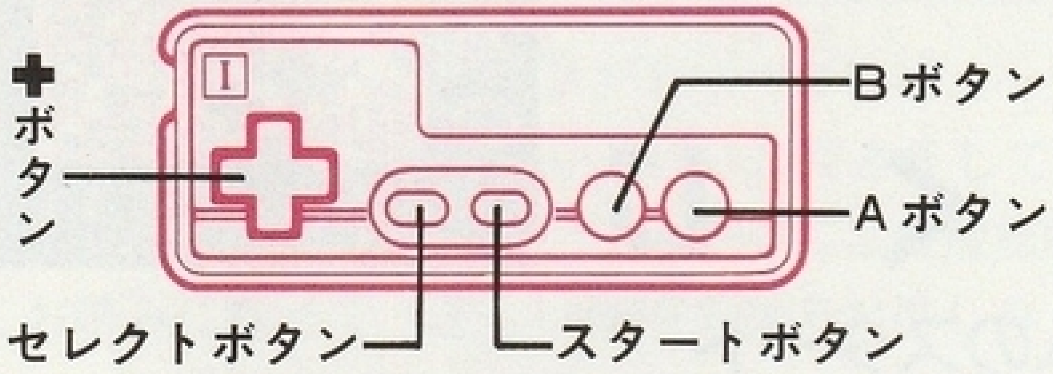
もくじ

ゲームのスタート
　コントローラーの使い方……2
名局観戦……4
棋力判定……6
収録棋譜一覧表……8
　古典……9
　近代……16
　現代
　　1989年に行われたタイトル戦と話題局……21
　置碁……29

ゲームのスタート

古今東西の名対局の棋譜を110局も収録しています。「名局観戦」「棋力判定」にお役立てください。

■コントローラーの使い方



コントローラーはⅠだけを使用します。ジョイスティックは使用できません。

Aボタン	✚ボタンで選んだコマンドを実行するとき、画面を次に進めるときなどに使います。
Bボタン	ゲームを中止したり、スピードを変えるときなどに使います。
スタートボタン	ゲームをスタートするときに使います。
セレクトボタン	ゲーム中は使用しません。
✚ボタン	コマンドを選んだり、石を打つ場所を決めるカーソルを動かすときに使います。

■ゲームを始める

電源を入れるとタイトル画面が現われます。どのボタンを押しても次の画面に変わり、ゲームが始まります。

■「観戦」か「判定」かを選択する

タイトル画面に続いて、選択画面が現われます。ここで「観戦」か「判定」かを決定しましょう。このときに「観戦」は自動・手動を、「判定」は中級・上級を選ぶことができます。

✚ボタンでカーソルを移動させ、プレイするモードを選び、Aボタンで決定します。

名局観戦

本ソフトに収録されている対局110局すべてを、観戦できるのが名局観戦です。

■観戦のスピード

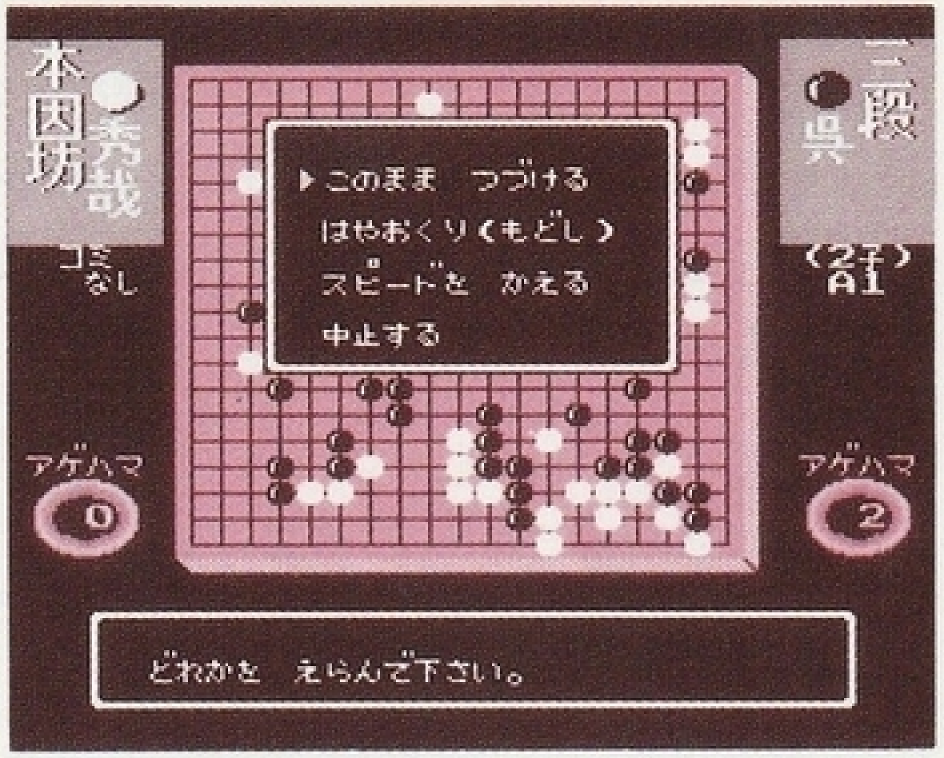
選択画面で「観戦Ｉ」の自動モードを選んだら、対局のスピードを選択します。大きい数字を選ぶと早く、小さい数字を選ぶと遅くなります。また、観戦をスタートしてからも、Ｂボタンを押して現われたコマンドの中から「スピードをかえる」を✚ボタンで選択しＡボタンで決定すると、始めのときと同様にスピードを変えることができます。

■棋譜の選択

観戦する棋譜(対局)を選びましょう。「古典」「近代」「現代」「置碁」の中からひとつ選び、＋ボタンでカーソルを合わせ、Ａボタンを押します。次に、それぞれ「古典」30局、「近代」20局、「現代」40局、「置碁」20局の中から見たい対局を＋ボタンで選択し、Ａボタンで決定するとスタートです。

■一時ストップ・中止

自動モードで観戦中の一時中断は、Ａボタンを押してください。もう一度Ａボタンを押せば、再開することができます。観戦を中止するときは、✚ボタンで「中止」にカーソルを合わせてからＡボタンを押しましょう。また、Ｂボタンで現われたコマンドから「中止する」を✚ボタンで選択し、Ａボタンで決定しても、観戦を中止することができます。



■早送り(戻し)

対局を先に進めたい場合や、前に戻したいときは、Ｂボタンを押して、現われたコマンドの中から「早おくり（もどし）」を✚ボタンで選択し、Ａボタンを押すと「○○○手目」と表示されます。✚ボタンの上下で数字の加減、左右で桁の移動をして、Ａボタンで決定すると、その番手から観戦をスタートします。

棋力判定

棋力の判定も、収録されているすべての棋譜で行えます。

■レベルの選択

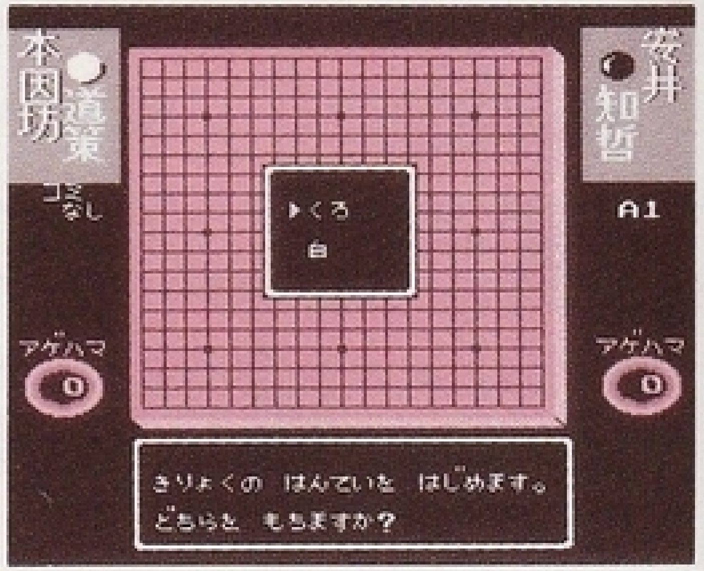
棋力の判定では、まずレベルを選びます。「判定 I」は中級者用（5級以上から4段以下）で、ヒントが5個でます。「判定2」は上級者用（2級以上から7段まで）で、ヒントがでません。

■棋譜（対局）を選ぶ

棋力の判定をする棋譜を選びましょう。対局の選び方は、名局観戦の場合と同様です。

■先手・後手（黒・白）を選ぶ

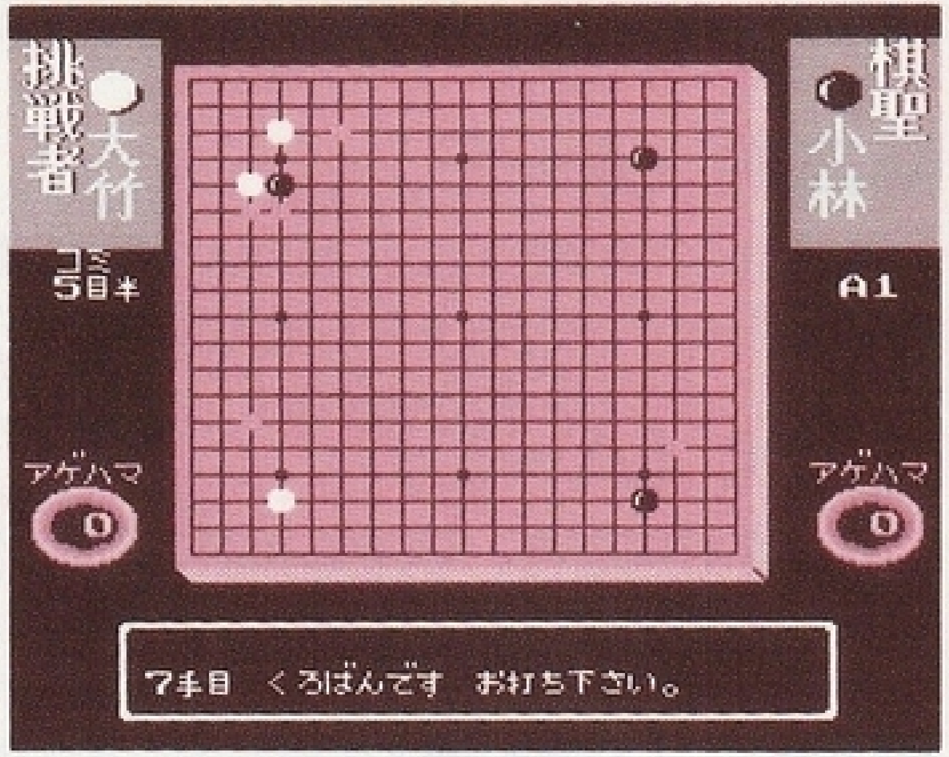
「次の一手」を推察する棋士を選びます。黒・白どちらでも選ぶことができます（置碁は白番だけです）。



■対局開始

黒番を選ぶと6手目、白番を選ぶと7手目まで自動的に進みます。「判定 I」の場合、ヒントが最大5ヵ所まで表示されます。プレイヤーの選択した棋士の番になったら、✚ボタンで天元にあるカーソルを推察した場所に移動させ、Aボタンで決定しましょう。

「判定 I」を選んでいる場合は、ヒントのあるところにしか打てません。



■棋力判定

対局が終了したり、また、途中でやめた場合も、正解率と棋力が表示されます（本ゲームでの正解は最善手ではなく、棋士が実際に打った手のことです）。

囲碁指南'91
収録棋譜一覧

■古典（A〜F）

寛文10(1670)年、安井知哲と本因坊道策戦から、明治14(1881)年、水谷縫次と村瀬秀甫戦まで。

■近代（A〜D）

昭和2(1957)年、鈴木為次郎と野沢竹朝戦から、昭和40(1956)年、林海峰と藤沢朋斎戦まで。

■現代（A〜H）

1989年度に行われた8大タイトル戦と、話題局を完全に収録。(棋聖戦は1990年度)

■置碁（A〜D）

置碁には置碁の真理がある。普段はあまり話題に上らない置碁にも、こんな名対局があったのだ。

※各アルファベットに5局ずつ収録されています。

1 ●安井知哲　○本因坊道策

「手筋の応酬」寛文10年(1670年)

道策の碁は両辺のモヨウをつなげるような雄大な構想が多い。黒29の実利、白30、32の拡大。大きく攻めるのは、道策の得意とするところ。

2 ●本因坊道策　○愚碩

「最強の抵抗」寛文12年(1672年)

愚碩は老年だったと思われるが、この碁の打ちまわしは若々しい。20とカケ黒を低位にして、相当な局面。黒57から最強の抵抗。

3 ●安井算哲　○本因坊道策

「ゆうゆう逃げきり」延宝2年(1674年)

黒171からコウをがんばって勝ったが、いっこうに差は縮まらず、ゆうゆう白の逃げきり。道策がこの時代を越えていた。

4 ●井上因碩　○本因坊道策

「兄弟対局」天和3年(1683年)

この碁は攻めの名局といってもいい。上辺に突入した黒をさまざまなテクニックでオサマらせなかった。

5 ●本碩　○本因坊道策

「五弟子のひとり」元禄10年(1697年)

道策と年齢が近い道節をべつにすれば、道的、策元、八碩に次ぐ打ち手が本碩である。

1 ●秀策 ○安井算知

「豪力算知」天保14年(1843年)

算知は渋い芸風で知られる安井仙知の実子。碁は似ても似つかぬ力戦型。このとき33歳、すでに天保四傑のひとり。

2 ●本因坊秀策 ○本因坊秀和

「フリカワリの応酬」嘉永４年(1851年)

秀策流から始まり、白14のワリウチは秀和が好んで用いた手法。華やかなフリカワリの一局である。

3 ●本因坊秀策 ○太田雄蔵

「争碁第十六局」嘉永６年(1853年)

これで秀策は三番勝ち越し、二度目のカド番に追い詰めた。本局はまったく非の打ちどころのない勝局である。

4 ●太田雄蔵 ○本因坊秀策

「余裕のある５目」嘉永６年(1853年)

手合直りになって雄蔵が気落ちした一局だが、それにまして秀策の収拾能力がきわだっている。

5 ●伊藤松和 ○本因坊秀策

「大混戦」安政３年(1856年)

秀策は黒番が端麗だが、白番でも相応の力を発揮している一局である。

1 ●阪口仙得 ○本因坊秀策

「仙得善戦」安政５年(1858年)

白86と囲って、ここでは形勢不明と見られる。上辺の白地をヘコませば形勢不明だが、白138と味よく守られて終わった。

2 ●林有美 ○本因坊秀策

「秀策の悪手」万延元年(1860年)

コウを争う間に、白はコウダテで22、24と切断してしまう。結局白がコウをつぎ、黒は29、31と右辺を生きなければならない。

3 ●村瀬秀甫 ○本因坊秀策

「胸を貸す」文久元年(1861年)

白70と逃げ、この一団の攻防が一局の焦点。

4 ●本因坊道知 ○井上因碩

「十番碁」宝永３年(1706年)

白16のような手を打たれて負かされたショックが、後半の道知に尾を引いたものであろうか。

5 ●安井仙知 ○本因坊烈元

「準名人の双方見損じ」天明７年(1787年)

古来、双方見損じの碁として有名な一局。白54では53の上にツケれば、シチョウを両方とも防いでいた。

1 ●井上安節　○本因坊元丈

「元丈一生の出来栄え」文政２年(1819年)

二子を布かせて一目敗の碁を名局とするのは、道策、春知戦のひそみにならったものであろう。

2 ●井上因碩　○本因坊道知

「御城碁」享得５年(1720年)

碁譜から見て、道知に先でも勝てない力量だろうと判断されている。

3 ●安井算知　○土屋秀和

「新手多発」天保10年(1839年)

このふたりは気が合ったらしく、互いにさまざまな新手を試み合っている。

4 ●本因坊秀和　○井上因碩

「秀和流」天保11年(1840年)

白46が因碩流、黒49が秀和流、黒97が妙着で、黒99のシチョウが成立した。

5 ●太田雄蔵　○本因坊秀和

「天保定石」天保14年(1843年)

白10までが天保定石である。白100が味のいい手で、ここで勝ちを確信していたのだろう。

1 ●岸本左一郎　○本因坊秀策

「リードした布石」嘉永７年(1854年)

黒がのびのびと打っている。黒23とハサみ上辺27にまわってリード。白172となってはたりない。

2 ●本因坊秀和　○村瀬秀甫

「自然に大モヨウ」明治４年(1871年)

黒は平然と守り、位で押し勝った。

3 ●水谷縫次　○村瀬秀甫

「大きく攻める」明治14年(1881年)

白の望みは中央だけになった。白102と広げたが、黒103から進出して十分と見ている。

4 ●本因坊秀策　○安井算知

「御城碁」嘉永２年(1849年)

秀策は先番に自信を持っており、先番必勝の布石として後代にもてはやされるのである。

5 ●本因坊秀策　○本因坊秀和

「中央経営」嘉永４年(1851年)

秀和、秀策ともに充実した時期の一局。白の思い切った中央経営が印象的である。

古
典
F

1 ●本因坊秀策　○太田雄蔵

「雄蔵三十番碁」嘉永６年(1853年)

雄蔵生涯の傑作とされている。

2 ●本因坊秀策　○阪口仙得

「御城碁」嘉永２年(1849年)

仙得は実戦より研究が好きだったと伝えられ、この碁も大斜の新手を試みている。

3 ●安井算知　○本因坊秀策

「御城碁」嘉永６年(1853年)

秀策大苦戦。黒125で126オサえる手があった。

4 ●林有美　○本因坊秀策

「御城碁」文久元年(1861年)

御城碁の最終局であると同時に、秀策の絶局ともなった。

5 ●村瀬秀甫　○本因坊秀策

「十番碁」文久元年(1861年)

形勢判断と手のヨミが一体化した局である。

碁豪秀策の名勝負

秀和戦　古典E-5
太田戦　古典F-1

本因坊秀策(1829〜1862)は『百五十年来の碁豪』と、称された。百五十年来とは、名人道策(1645〜1702)以来ということである。碁聖秀策が34歳という若さで死ななかったら、碁の歴史は変わっていただろう。

秀策の対局の中では、兄弟子の秀和との戦いの中にこれぞ名局といえるものがいくつか残されている。

嘉永４(1851)年10月22日の対局は、両者とも充実期の一局。「私の見るかぎり疑問手は一手も見いだせない。あまりに美しすぎて、かえってつまらないという人もいよう。まずは一幅の名画のつもりで鑑賞してはいかがか(石田芳夫九段評)。」

秀策の対局は、太田雄蔵との三十番碁も有名である。二人の初手合は天保13年、雄蔵36歳六段、秀策14歳二段。以後20年間に渡って拮抗したものである。

二十二局目まで優勢に勝負を進めた秀策。二十三局目は秀策の先番なので、周囲は秀策の勝ちを疑わなかったが、結果は持碁となった。のち、秀策は知人に向かった「彼の三十番碁に於て二十三局目は恐らく太田氏の畢生の傑作ならん」と評したといわれている。この碁の後、雄蔵は再び秀策に向かおうとはせず、三十番碁は中絶し、旅先で死亡した。秀策は好敵手を失って大いに痛惜した。

1 ●呉清源三段格　○本因坊秀哉

「歩武堂々」昭和４年(1929年)

黒の態度荘重を極め、最後まで優勢を継続し、二子局として快心の傑作である。

2 ●呉清源五段　○木谷実五段

「新布石の回想」昭和８年(1933年)

白114を敗着としている。双方最善にヨセ合えば、10目近い差のようだ。

3 ●木谷実七段　○呉清源七段

「木谷流」昭和14年(1939年)

黒は堅固な実利。黒53では、通常左辺の消しに向かうが、囲わせてから突入するのが木谷流。

4 ●雁金準一　○呉清源

「絡み付く碁」昭和16年(1941年)

雁金六十三歳、呉二十八歳。優勢の碁は、最短距離で勝ち碁に持っていくといわれた強さの一端である。

5 ●橋本宇太郎八段　○呉清源八段

「両三々」昭和21年(1946年)

五段当時を思い出してか、呉両三々、黒93の逆襲に白94から再逆襲。

1 ●本因坊薫和　○呉清源九段

「力闘の持碁」昭和23年(1948年)

当時の慣例によれば、相手にコウダテがなければ、ヌク必要がないとされ、呉もそれに従う。日本棋院囲碁規約がまもなく制定。

2 ●藤沢庫之助九段　○呉清源九段

「梅鉢の局」昭和27年(1952年)

白52とトンで中原大作戦。白88と反撃され、フリカワリは中央の白が厚くなる。

3 ●呉清源九段　○坂田栄男八段

「完勝」昭和28年(1953年)

黒51に石がきたので黒53、55のツケギリがピッタリした。黒61と先手で厚みを作り、黒65と取りきって断然優勢である。

4 ●本因坊秀格　○呉清源

「コミナシ碁」昭和31年(1956年)

非勢になっても呉は動じない。敗着を縮めるべく営々と努力し、結果的には逆転につながる場合が多かった。

5 ●坂田栄男九段　○呉清源九段

「最終局」昭和37年(1962年)

この時点で藤沢九勝二敗、呉と坂田が八勝三敗。藤沢が負ければこの碁の勝者とのプレーオフが予定されていた。

1 ●木谷実 ○呉清源

「鎌倉十番碁」昭和15年(1940年)

黒21は新手で、29までは相当なワカレである。黒151までは三方をしのいでは黒がよい。

2 ●鈴木為次郎 ○野沢竹朝

「院社対抗戦」昭和２年(1927年)

この碁の観戦記には当時の作家を総動員した。

3 ●呉清源 ○木谷実

「鎌倉十番碁」昭和４年(1929年)

「太閤碁」というのは、豊臣秀吉が碁を知らないときに、第一着を天元に打ち、あとは真似をしたという言い伝えによるもの。

4 ●呉清源 ○本因坊秀哉

「評の評」昭和５年(1930年)

黒８は39に寄せ、白55なら74として、白を一方碁にする方がよい。

5 ●呉清源 ○本因坊秀哉

「四角星」昭和８年(1933年)

呉は国籍の違いもあって、名人という権威に重圧を感じることなく、思ったまま打てたという。

1 ●木谷実 ○本因坊秀哉

「新布石」昭和13年(1938年)

白24、26は名人の新手。黒63、65は白を固めたに過ぎないという秀哉評。

2 ●呉清源 ○高川格

「優勢確定」昭和32年(1957年)

白92では、99にトンでおくのだったと高川評。黒109で優勢確定。

3 ●木谷実 ○本因坊秀格

「二度目の挑戦」昭和35年(1960年)

黒121に対して、白122と切った。黒のギモン手について、白の強烈なパンチが炸裂した白122の鬼手。

4 ●藤沢秀行 ○坂田栄男

「第一期名人戦の最終局」昭和38年(1963年)

呉、坂田戦が持碁となり、持碁は半星の規定だったので、藤沢が決定戦を打たずに優勝した。

5 ●林海峰 ○藤沢朋斎

「白番マネ碁」昭和40年(1965年)

藤沢の提起した白番マネ碁は、現在シチョウを利用した対応策が固まり、試みる者はいない。

新布石の誕生秘話　近代A-2

「大胆、均整、単純」をテーマとする新布石の嵐に全碁界が巻き込まれたのは、日本が軍国主義に傾斜しかかった昭和の始めの事である。抑圧の加わった世相からの脱出口のひとつであったと、現代では分析されている。囲碁界の革命時代だった。

昭和８年に行われた時事新報主催十番碁第五局、木谷実五段と呉清源五段の対局が新布石生誕譜とある（昭和38年『棋道』新布石の回想 呉清源）。しかし、スタート時点ではまだ明確な中央指向がなかった。

呉は五段に進んでから白番が多くなり、それまでの秀策流を捨て「角をシマらない布石」を研究していた。木谷の考えていたのは、行き詰まりに近づいた従来の布石を「戦い」の観点から再検討した中央重視布石であった。

この碁は、白30とケイマしたところで打ち掛けとなり、打ち継ぎは１カ月後なので、その間に信州へ旅行することになった。旅行後、この碁をは打ち継がれたが、その第一手が黒31。もし信州旅行がなかったら、そうは打たなかっただろうと呉五段は記している。ここに二人の新布石が誕生したのだ。

新布石の嵐が沈静したのちに残ったのは、バランス感覚と布石速度の観念だった。

1　●小林光一棋聖　○大竹英雄九段

「棋聖戦七番勝負第14期第１局」

黒29のコスミは珍型だが、小林流の厳しい手。黒35の好点に廻りリードする。

2　●大竹英雄九段　○小林光一棋聖

「棋聖戦七番勝負第14期第２局」

白90のコスミ込みは小林流の手である。黒93のツケが本局のハイライト。

3　●小林光一棋聖　○大竹英雄九段

「棋聖戦七番勝負第14期第３局」

白128、130と切り、黒三子を取り込むが、黒も131まで右辺をワタリ、この時点で盤面10数目の大差。

4　●大竹英雄九段　○小林光一棋聖

「棋聖戦七番勝負第14期第４局」

白36の打ち込みは打ち過ぎ。黒101はスゴイ勝負手。しかし白128と先制攻撃され、黒はシノギに大わらわ。

5　●小林光一棋聖　○大竹英雄九段

「棋聖戦七番勝負第14期第５局」

黒41と入り、左上辺から見ごたえある攻防戦となるが、白60まではいい加減の分かれ。黒77と白模様の中で居直っては黒優勢。

1 ●小林光一名人　○淡路修三九段

「名人戦七番勝負第14期第1局」

白20、22の連打と黒21の取りとでは、明らかに黒が一本取った。白40は勝負手。黒167が形勢を楽観した敗着。

2 ●淡路修三九段　○小林光一名人

「名人戦七番勝負第14期第2局」

左下の新型は黒23とポン抜いて黒よし。黒85が敗着。ここも右辺に黒90と走らなければならない。

3 ●小林光一名人　○淡路修三九段

「名人戦七番勝負第14期第3局」

白100は生きと見て妥協した。上辺棒状の白の大石を攻めて黒好調。

4 ●淡路修三九段　○小林光一名人

「名人戦七番勝負第14期第4局」

左辺での白のサバキは問題で、黒53と中央を制し、黒が一本取った。白154、156と先手抜きを得て、白の勝ちは動かない。

5 ●小林光一名人　○淡路修三九段

「名人戦七番勝負第14期第5局」

黒159までここを荒らされては、地では争えない。黒159から63まで突き抜けられ、勝敗はすでに決した。

1 ●趙治勲十段　○武宮正樹本因坊

「本因坊戦七番勝負第44期第1局」

白62は疑問手。辛抱して63とつぐがよかった。黒147の決勝点に廻り、盤面10目以上の差。

2 ●武宮正樹本因坊　○趙治勲十段

「本因坊戦七番勝負第44期第2局」

白82、90は誰も予想しなかったすごい頑張り。右下黒93、95敗着。

3 ●趙治勲十段　○武宮正樹本因坊

「本因坊戦七番勝負第44期第3局」

黒89とトンだとき、白82が中途半端な位置にあり、黒93、95と突破され、白は形勢を損じる。

4 ●武宮正樹本因坊　○趙治勲十段

「本因坊戦七番勝負第44期第4局」

黒69以降の上辺の荒らし方は満点だった。白96、98は勝負手。黒19が敗着。

5 ●林海峰九段　○趙治勲十段

「十段戦五番勝負第27期第1局」

黒131がねらいの一手で、白の大石が相当あぶない。黒145が敗着。

1 ●趙治勲十段　○林海峰九段

「十段戦五番勝負第27期第２局」

黒55切りに白56ワリ込みが返し技。黒89のツケに白90とハネたのが敗着。

2 ●林海峰九段　○趙治勲十段

「十段戦五番勝負第27期第３局」

白32のツケがサバキの基本手筋。白52でカナメの黒二子が動けないようでは白ペースだろう。白114の切りに黒115敗着。

3 ●林海峰九段　○趙治勲天元

「天元戦五番勝負第15期第１局」

白70までおさまっては白優勢である。白84から二子を取って、勝ちを確信した。

4 ●趙治勲天元　○林海峰九段

「天元戦五番勝負第15期第２局」

黒47がおくれる原因。白100が急所の一発で、これが決定打となった。

5 ●林海峰九段　○趙治勲天元

「天元戦五番勝負第15期第３局」

黒75に白76、78がすごい頑張りで、これが林九段の失着とつながった。

1 ●趙治勲天元　○林海峰九段

「天元戦五番勝負第15期第４局」

白76のアテが悪手で、単に78とツナガる方がいい。白68の時点で盤面勝負。でも白が得をして盤面でも勝ち。

2 ●林海峰九段　○趙治勲天元

「天元戦五番勝負第15期第５局」

白80ノゾキ一本で手抜きは、黒の82のマガリで攻めがきつい。白162、164は勝負手だったが、黒177まで下辺は手がなく碁は終わった。

3 ●羽根泰正九段　○加藤正夫王座

「王座戦五番勝負第37期第１局」

黒29のツメはねらいすぎで、46の引きで十分だった。黒111で本来ならば終局のところを白112から両者ダメをつめ始めるという珍しい碁。

4 ●加藤正夫王座　○羽根泰正九段

「王座戦五番勝負第37期第２局」

黒141、白142のあと黒160で手にされるのを気が付き、補強した白140が敗着となった。２目損を招き黒逆転。

5 ●羽根泰正九段　○加藤正夫王座

「王座戦五番勝負第37期第３局」

白76から80まで右辺を収まっては白が面白い。黒81が敗着。あっという間に大石がとん死、勝負が決まる。

1 ●加藤正夫王座　○羽根泰正九段

「王座戦五番勝負第37期第４局」

白62ハネが敗着。この手は単に86とトブところで、そう打てばこれからの碁だった。黒29に廻り大差。

2 ●今村俊也八段　○小林光一碁聖

「碁聖戦五番勝負第14期第１局」

黒35から39の切りが痛烈で、この後は白の勝ちにくい碁となった。黒107でやはり黒の優位は動かない。

3 ●小林光一碁聖　○今村俊也八段

「碁聖戦五番勝負第14期第２局」

黒105のノゾキが好手。黒107も好手。以下黒111となっては中央の黒はシノギ形になり、逆に白の方がうすくなった。

4 ●今村俊也八段　○小林光一碁聖

「碁聖戦五番勝負第14期第３局」

黒33とツギ、白34と中央を突っ切っては白が一本取った格好。白50のツケ強手。黒101のオサエが敗着。

5 ●小林光一碁聖　○今村俊也八段

「碁聖戦五番勝負第14期第４局」

白68のツケが問題の一着。黒73までの生き方は黒がうまい。黒89のスベリが大きな手で、この手が決勝点。

1 ●楠光子本因坊　○小川誠子四段

「女流本因坊戦三番勝負第８期第１局」

白の優勢も白62でフイにしてしまった。黒69と大きく地を持って一気に黒がよくなった。

2 ●小川誠子四段　○楠光子本因坊

「女流本因坊戦三番勝負第８期第２局」

白32に黒33から39と出切ったのは気合。白126のツケから難解な戦いに突入したが、黒137が敗着となった。

3 ●武宮正樹九段　○林海峰九段

「第２回世界囲碁選手権戦」

白82が敗着となった。右辺の黒も171と生きて盤面10目は残りそう。黒181が生じて差が開いた。

4 ●石田芳夫九段　○大竹英雄九段

「第２回IBM早碁オープン戦決勝」

黒65が好手。黒75までとなり黒が優勢。しかし黒77が稼ぎすぎ。92とコスンで中に頭を出していれば十分。最後の敗着は黒123。

5 ●本田邦久九段　○上村邦夫八段

「第２回世界選手権最終予選」

本局は平成元年の最短手数局。昭和40年の前田、春山戦の33手に次ぐ記録である。まず白34が重大な手順ミス。

1 ●小西泰三六段　○安倍吉輝九段

「第15回碁聖戦二次予選」

白44のトビがすましすぎの緩着。黒149が決定的な敗着である。

2 ●藤沢秀行九段　○坂田栄男九段

「第37回ＮＨＫ杯争奪戦」

坂田70歳、藤沢65歳。黒167は168にトビ込む一手。４目の損だが、黒の前半のリードが大きく、差が接近したにすぎない。

3 ●泉谷英雄四段　○梶原武雄九段

「第38回王座戦二次予選」

黒103のツケに、白は反発できず、黒113にヒラいて完全に勝負あった。黒123は勝ちと見た安全策。

4 ●山田規三生二段　○石田篤司四段

「第46回本因坊戦一次予選」

黒19、21がキビシい攻めになった。白36のハネは悪手。白118が敗着。これで121のツギならまだヨセ勝負。

5 ●依田紀基七段　○安倍吉輝九段

「第２回世界選手権本戦」

黒17は手抜きされて疑問。白48が敗着。黒は105以下堅実な足取りでリードを守り、盤面15目差は動かない。

1 ●坂田栄男本因坊　○橋本昌二九段

本局の見どころ　昭和41年（1966年）

置碁には置碁の真理があっていいはず。置碁を充分に働かすにはどうったらいいのか、これが置碁の見本というのを読み取ってほしい。

2 ●東野弘昭八段　○石井新蔵七段

本局の見どころ　昭和41年（1966年）

東野八段は形のよい形勢判断の明るい碁。石井七段は眠っているような顔をしてズバリ切り込むところから、〝眠り狂四郎〟と呼ばれている。

3 ●藤沢秀行九段　○宮本直毅八段

本局の見どころ　昭和41年（1966年）

並べ終わって黒68目の勝ち。「よう負けるもんだなぁ」と宮本八段はため息をついたが、藤沢九段はまだ勝ち足りない様子であった。

4 ●南善己六段　○小川靖男七段

本局の見どころ　昭和41年（1966年）

相手の弱い石を作っておくことは、序盤に少々の地をとっておくよりは効果がある。この碁の見どころである。

5 ●白石裕七段　○宮本義久八段

本局の見どころ　昭和41年（1966年）

本局は始めから左辺、上辺と打ち込んだ白をシノイでしまった白が、白175の一着から黒の猛反撃にあい、結局差が大きくなった。

1 ●橋本宇太郎九段　○瀬越憲作九段

本局の見どころ　昭和41年（1966年）

両者は、囲碁界では知らない人がないほどの睦まじい師弟関係。そうでなかったらおそらくこの対局も実現しなかったと思われる。

2 ●橋本昌二九段　○坂田栄男本因坊

本局の見どころ　昭和41年（1966年）

この碁は序盤に下辺の戦いから黒の打ちやすい局面ができあがった。後半、坂田本因坊の必死のシノギ場面など、興味あふれる一局。

3 ●宮本義久八段　○鈴木越雄七段

本局の見どころ　昭和41年（1966年）

序盤から中盤にかけて、白の巧妙な打ちまわしが目だち、中盤の終わりから黒の強さが表われ、104の手から強手を乱発していくところ。

4 ●宮本直毅八段　○藤沢秀行九段

本局の見どころ　昭和41年（1966年）

序盤から戦いに入り、白の巧みなシノギ、黒の豪快な捨石戦法。この碁によって碁の面白さが倍加された。

5 ●鈴木越男七段　○南善己六段

本局の見どころ　昭和41年（1966年）

本局は鈴木七段のスケール大きな作戦の碁で、それに南六段の力がぶつかり、まれに見る熱戦が繰り広げられた。

1 ●和田金太郎二段　○本因坊秀策

本局の見どころ　嘉永元年（1848年）

和田金太郎は本因坊家の内弟子。

2 ●和田金太郎二段　○本因坊秀策

本局の見どころ　嘉永元年（1848年）

和田金太郎は本因坊家の内弟子。

3 ●水谷縫次二段　○本因坊秀策

本局の見どころ　安政４年（1857年）

四子局とは、ひたすら簡明に打つこと。形が決まって後がわかりやすくなる。

4 ●石田芳夫　○金島忠

本局の見どころ

隅から中央へ向かい石が競っていけば、天元の一子ががぜん威力を発揮する。黒の作戦としては白を攻め、天元の石を活用する。

5 ●小松英子　○石田芳夫

本局の見どころ

七子は上辺と、下辺が空いていて、そう簡単に攻められないから、最初は少しおだやかに打つ。

1 ●屋良里之子　◯本因坊道知

本局の見どころ　宝永7年(1710年)

力の強い下手をこなす古今の名局である。道知の打ち廻しに抗すべくもなかった。

2 ●大矢浩一　◯石田芳夫

本局の見どころ

左上隅をもう少し巧く手にしないといけなかった。黒は中盤でもたついたけれど、そのあといっぱいに頑張った。

3 ●小岸壮二　◯本因坊秀哉

本局の見どころ　明治44年(1911年)

小岸壮二は明治31年大分県中津の出身。本因坊秀哉の門下生。

4 ●新海洋子　◯石田芳夫

本局の見どころ

この碁は特に乱戦につぐ乱戦であり、見ごたえは黒がその難解な戦いをいかに乗り切ったかである。

5 ●石田芳夫　◯佐藤昌晴

本局の見どころ

八子局の打ち方は九子局と原則的に変わらない。やはり白石を割っていくことが、自然に攻めの効果となって現われる。

■本ゲームソフト及び取扱説明書の制作にあたり、以下の書籍から引用、また参考にさせていただきました。

「囲碁百科辞典」(林　裕編著／金園社)
「囲碁年鑑1990」(日本棋院)
「本因坊秀哉全集　第四巻」(秀哉会／日本棋院)
「道を拓いた三大巨星　道策、秀策、呉清源」
(石田芳夫著／誠文堂 新光社)
「囲碁史談」(日本棋院)
「本因坊秀策全集」(荒木直躬編／日本棋院)
「プロ対プロ置碁実戦譜上・下巻」(山海堂)
「ＮＥＷ別冊囲碁クラブNo.12　石田芳夫のプロプロ置碁」
(日本棋院)

■資料提供・協力／財団法人　日本棋院

■パッケージデザイン／泉　晶子
■取扱説明書デザイン／山口一美
■パッケージ写真提供／ボンカラー(鍋田益雄)
■制作／ワークハウス